

『の』の字健康法

鈴木丸衛

先年（昭和四十五年）『たつみ』第一二号に『健康に関するアンケート』に対する会員諸賢の回答が寄せられ、教えられるところ多々ありましたが、その中に小生も参加させて頂きましたので、或はご記憶の方も居られることと存じますが、拙文の要旨は、人間生れてから死ぬまでの永い期間胃腸の恩恵を受けること多大なるものがあるので、これに対し報恩感謝の念をこめ、且つ血行循環の促進をはかる意味を以て、就寝又

★秋季阪神例会案内
一、日時 十月十五日（火）午前
十時半
二、会場 大阪市東区南本町一丁目一番地
帝人株式会社ホール
三、映画「金子直吉」映写
会員歓談
四、会費 一、〇〇〇円
多数御参加下さい。

は朝眼ざめた時、仰臥のまま、腹部を、右の手掌にて『の』の字を五〇回、左手掌にて五〇回と交互に撫で廻し五〇〇回に至るといいうのであります。今でも、会う人毎に此方法を、健康の一助としておすすめして居るのですが、偶然にも東大名誉教授で中国哲学の泰斗故宇野哲人博士が同様のことを言っていることを、生前の昨四十八年六月、日本工業クラブに於ける博士門下生達の主催の同博士白寿祝賀会に於て、健康の秘訣をきかれたのに対し、佐藤栄作前首相等を前にし、健康法として『腹八分目を守る、夜寝る前にヘソの上に大きく『の』の字を何度も書く』と披露された由当時の新聞紙によつて知りまして、先輩に知己を得たように感じたことでしたが、同博士は惜くも本年二月十九日九十八才の天寿を全うしその生涯を閉ぢられました。辰巳会の諸賢も何卒この『の』の字健康法をご理解とご賛同を賜りますよう切望に堪えません。（終）

巨人、依岡省輔氏の片鱗

竹崎茂助

私が高等小学二年生の秋、受持土居英成先生（後年鈴木商店庶務主任）から、神鋼への入社を勧められて、明治四十四年（神鋼法人組織）も押詰った十二月、十四才の弱年で来神入社したいきさつは、たつみ十八号に『大正時代の神戸製鋼』と言う課題で掲載されたが、当時の神鋼主脳は、社長黒川勇熊、専務依岡省輔、常務田宮嘉右衛門の諸氏であり、実質的総ての運用は、依岡、田宮両氏の下で展開されていた。

田宮氏が稀代の人格、手腕者で、神鋼今日の発展の基礎を造られた事情の一端は、たつみ号で申述べた通りであるが、今回は依岡氏に就いて、側面から見た巨人の片りんをご紹介します。致しませぬ。

非日沙商会へ転勤するよう強く要望された。
同社は社長依岡氏（神鋼専務兼任）支配人近藤正太郎氏（上求）の土居英成氏と中学時代の同窓、且最大の親友、そして又私の最大の恩人であった。
依岡氏は長身、肥満、二十数貫の巨軀で、その肝っ玉は尚それを遙かに上廻る一大巨人であった。
彼が長府を引揚げて来神、金子直吉氏に会った時、金子氏（兩人共土佐県出身）が、
「おまはんの最も得意は？」
と、問われた時、言下に、
「強いて言えば、大食と知事や將軍を説き伏せることノ」
と、回答して金子氏を感心させ、神鋼への入社となった。
その大食の一例であるが、神鋼會計部長、吉松氏（依岡氏と同窓）が、高知県人会の幹事会を開く適当な料亭の紹介を乞うた時、私と宮田氏がよく行った、あみだ池の二葉を推せ

ん、一応検分、試食のため依岡、吉松、宮田、竹崎の四名で行き、食事後女中頭お君さんの要望で、大丸横の松寿司へ行き、尚その足で北陽で有名な菊屋で食事を共にした。その時依岡氏が、
「自分は神戸の焼き焼へ人を招いているから、これから帰るが、皆はゆっくりするように！」
これには依岡氏を知り尽くしている三人も一驚し、その健啖ぶりに呆然とした。

依岡氏は神鋼よりも寧ろ鈴木商店関係の重要事項が多く、月の内二十五日は旅行に明け暮れ、その不在中は私が寝泊りをして留守居を担当した。
そして其旅行の先々で必ず郵便貯金した。金壱円（今の千円以上）だった。目的は旅行先を記録する日誌の役となっていた。私も紡績関係等で旅行が割合多かったのだから、を真似て、出張の度毎に局へ行つたが、その為列車に乗り遅れるなど支障が多いので中止したが、依岡氏は出先で使いに之れをやらせて、時にタクシー代や、使いへの謝礼で経費の方が上廻っていた。

依岡氏の偉大さに就いて二、三エピソードを述べるが、或る時客を案内して播磨造船所への途、姫路の愛楽園（元、家老邸）で昼食し、その時出された名物の寿司が、余りに美味だったので、
「何時の汽車で姫路駅を通るから、この寿司を三十個頼む」
と、依頼した。そして其時間に姫路駅へ着いたら、車窓から三十箱の寿司が次々と車内へ持込まれたので驚いた。依岡さんが頼んだ三十個を、女中さんが相手の偉大さに感嘆したか？三十箱に間違えたのだ。又、清水港に創設中の豊年製油の要件で出張した際、県知事と共に箱根の一流料亭へ連立つて赴いたが、出て来た女中が、
「知事さま、済みませんが、今日ほどの部屋も超満員で、空室が有りませんので！」
と、断わられた。その時知事の後ろから、
「私は神戸の依岡だが、何とかならぬか」
と、交渉したら、女中さんが、
「あら、依岡様ですか？何とか致します」
と、応接間へ一応案内した。

某県の知事が交渉を断わられたものが、依岡氏の申出で成功した事は、依岡氏平素の動静がよく解るようである。
ある時、海軍の高官を東京郊外、多摩川畔の松葉茶屋へ招待すべく、電報で依頼し、依岡氏は上京した。松葉茶屋の玄関前には百足ほどの草履が、所狭しと並んでいて、依岡氏は、
「えらい日にぶつかったものだ」
と、内心悔みながら、
「今日は何処の宴会ですか？」
と、尋ねたら、女中さんが、
「依岡さま、貴郎さまですが！」
と言われて、流石の依岡氏も一驚が誤読されて、『九二八タノム』に解せられたからで、これも平素の偉大さが逆に祟った結果であろう。

昭和九年春、日沙商会と、唯一の同業者、帝国堅紙（三井系）が合併し、東洋ファイバーを創設に際し、帝堅社長、東席二郎氏から『老年最後の勤めとして第一期社長に！』との要望があり、私も同伴してよく帝堅を訪れた。金子氏は、その人格、力量をよく知っているので承諾し、その旨長府滞在中の依岡氏へ打電するよう命ぜられたが、私は自身この打電をする気になれず、金子氏より直接を願ひ、その結果依岡氏より、

「承知した。自分は会長に就任する」
との返電が届いた。
昭和十二年三月、東洋ファイバー春季総会へ出向き（株主は日沙と帝堅の二人で頗る簡単）終了の後役員一同が料亭で食事中、依岡氏危篤の来電あり、日沙系役員が急いで神乗車中『逝去』との悲電を受取った。三月二十七日、依岡氏満六十五才であった。
葬儀は山手の青年会館で行われ、お棺を担ぐ四名の中へ私も選ばれる光栄に接した。
葬儀行列の途中、東洋ファイバー工場（元、日沙商会）前で、従業員一同の見送りを受け、青年会館葬式の最初、政府からの弔辞を私が代読した。
昭和四十九年三月
元、日沙商会勤務
以上

